

主 題：十分だったキリストの御業②**聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章13-14節****テーマ：キリストの御業がいかに私たちにとって十分なものであったのか？**

先週から私たちは、コロサイ2：11-15「十分だったキリストのみわざ」について考え始めました。きょうもその続きの、特に13-14節を中心に考えたいと思います。流れを思い出すためにいま一度、8-15節までお読みしますので、ぜひよく見てください。

コロサイ2：8-15

「:8 あのむなし、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものではありません。:9 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。:10 そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。:11 キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。:12 あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。:13 あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、:14 いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。:15 神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」

さて、前回見たことを思い返してみてください。私たちは今、コロサイの教会に入り込んだにせ教師たちの脅威に対するパウロのこぼしを学んでいます。正しい道を歩もうとしているその教会をだまそうとするさまざまな誘惑、キリストだけでは不十分だと言う偽りの教え…そういった危険が実際に存在していることをわかっていたパウロは、愛する兄弟姉妹たちに向かって「注意しなさい」と警告していたのです。「むなしいだましごとの哲学に惑わされてはいけません。キリストを除いた何の中身も価値もないそんな世の教えや宗教、人の言い伝えに心を奪われてはいけません。あなたがたはただ、満ち満ちたキリストに目を向けていなさい。」と。こうしてパウロは彼らに差し迫る危険を知らせて、そんな彼らを守ってくれる満ち満ちたキリストの姿に心を留めるようにと、偉大な主の姿を思い出させていました。「キリストだけが十分であって、彼らにとってすべてなのだ。」と改めて訴えていたのです。でも同時に、パウロがここでしていたことはそれだけではありませんでした。彼はただ、キリストのすばらしい偉大な姿を思い起こさせていただけではなく、そのキリストにあって成し遂げられた完全なみわざについても教えていました。キリストご自身が十分なだけでなく、そのキリストが成し遂げたみわざも同じように十分なものなのだ、と改めて思い出させていたのです。特にパウロはこの11-15節の部分で、キリストのうちに見出される十分なものを三つ挙げてくれていました。先週私たちはその一つ目となるものを見ました。

○完全だったキリストの御業：キリストのうちに見出す三つの“十分なもの”**1. 完全な救い 11-12節**

一つ目は「完全な救い」でした。人の行いでも世の慣習でもありません。キリストの割礼を受けて、キリストとともにバプテスマを受けた者はみな、キリストにあって救われました。かつての古い自分はキリストとともにもう死んで、神様によって新しい者へと造り変えられたのです。キリストがもたらさ

れたその救いだけが、私たちにとって十分なものでした。でもこれがすべてではありません。続けてキリストのうちに見出される十分なものを13-14節のところで考えてみたいと思います。

2. 完全な罪の赦し 13-14節

キリストのうちに見出される十分なもの、二つ目が13-14節に記されていました。二つ目は「完全な罪の赦し」でした。キリストの成し遂げたみわざというのは、確かに罪の赦しにおいても完全なものでした。それが完全で十分すぎるものであったからこそ、ほかに何かを付け足す必要は全くなかったのです。そのことをパウロは続く13-14節で明白に宣べてくれていました。また特に彼はここで、キリストにある罪の赦しに関して四つの要素を挙げていました。いかにその赦しというものが十分なものであるかを、改めて四つのことに触れることでパウロはコロサイの兄弟姉妹に思い出させていたのです。いったいどんな要素を挙げていたのか、パウロのことばをよく見てみましょう。13節はこのように始まっていました。「あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、」と。

●キリストにある罪の赦し：四つの要素

1) 赦しの必要性 13 a 節

まず一つ目にあげていた要素、それは「赦しの必要性」でした。パウロは初めに、コロサイの兄弟姉妹たちがどれほど罪の赦しを必要とした存在だったのかを思い起こさせていたのです。はっきりと書いていましたね。「あなたがたは…死んだ者であったのに」と。「死んだ者」これが主キリスト・イエスを受け入れる前の人々の状態でした。キリストから遠く離れた者はみな、例外なく死んでいたというのです。何かしらの深刻な病気にかかって苦しんでいたのではありません。死の危険に瀕していたのでもありません。みことばが教えていること、それは、神様から離れていたすべての者は例外なく、私やあなたも死んだ者だった、ということです。肉体的には生きていても、霊的には完全に死んでいたというのです。少し考えてみてください。すでに亡くなってしまった人の特徴とはどんなものでしょう？その人は何もすることができません。たとえどれだけ近くで大声で呼びかけようとも、気づくこともなければ、それに応答することはありません。どれだけ強い刺激を与えたとしても再びからだを動かすこともありません。死んでしまった者のうちに、いのちは一切宿っていないのです。パウロがここで言わんとしたことも同じでした。「あなたがたは、かつては死んだ者であった。」と。キリストを信じ受け入れている者はみな、霊的に死んだ状態にありました。死んでいたからこそ、キリストや福音の真理にみずから応答することなどあり得なかったのです。

でも同時に、ただ死んでいたのでもありませんでした。パウロはここで二つのことばを加えていました。「罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であった」と。「罪によって、また肉の割礼がなくて」とは何でしょう？

▶「罪」（“ハマルティア”「的を外す」「パラブトーマ」「足を踏み外す」）

ここで用いられていた「罪」ということばには、実は、ごく一般的に「罪」を表すものとは異なることばが使われています。ご存じの方があられるかもしれませんが、新約聖書の中で「罪」ということばを扱うとき、多くの場合が「的を外す」という意味を持つギリシャ語“ハマルティア”というものが用いられます。的を外すのです。想像してみてください。弓矢を持った狩人が標的となる獲物に向かって矢を放とうとしています。でも弓を十分に引かず、矢の向きを正しく表的に定めていなければ、放った矢はきちんと獲物に命中しないのです。これと同じように、人々が本来従うべき神様や、そのみことばといった正しい的を外していること、それを、聖書は「罪だ」と教えていました。それが意図的であろうがなかろうが、どんな行為や考えであろうとも関係ありません。神様が定めた基準に足りていないこと、十分に届いていないこと、的を外していること、それが「罪」だったのです。でもここで用いられていたのは、そんな「的を外す」ということばではありませんでした。ここには“パラブトーマ”ということばが使われているのです。違いは何なのか？このパラブトーマということばには元々「ある人が足を

踏みはずしてしまう」という意味が含まれていました。そしてここから「背く」とか「違反する」といった形で用いられました。みずから背くのです。違反するのです。違いがわかります？要するにここでの「罪」というのは、ただ単に的を外していることを言っていたのではありません。これは、神様が定めていた正しい道がそこにあったとしても、自分の意思でその道を踏み外し、それに背くことを表しているのです。偶然、誤って行ってしまったものではありません。たとえ自分のしていることが間違っているとわかっていたとしても、神様を拒んでみずから逆らおうとするのです。そんな罪の中を、そんな背きの中を、すべての者が歩んでいました。

また「肉の割礼がなく」ともありました。これは先週私たちが見た11節と結びついているのですが、覚えていますか？キリストのうちにある者というのは、人の手によらない霊的な割礼を受けて、神様によって肉を脱ぎ捨てた者でした。キリストにあって、古い罪に汚れたそのからだを取り除かれて、新しい者へと造り変えられていたのです。それがキリストのうちにある者でした。その逆に、キリストのうちにはない者、つまり救われる以前の者とはどんな者でしょうか？そんな者はみな、ただ罪の奴隷でした。肉の思いに支配され、みずから罪に罪を重ねて、聖なる神様の前に逆らい続けていました。キリストから遠く離れていた者はみな、罪の中に死んだ者だったのです。そしてそれはここにいる私たちひとりひとりと同じでした。私たちもみな、罪の中に死んでいたからこそ、神様やみことばを愛することもありませんでした。救いの知らせを聞いたとしても、それを喜ぶこともありませんでした。たとえ何度も何度も福音を耳にしたとしても、それを信じることは愚かに思えて、神様のためにすべてを捨てて生きていくことよりも、自分自身のために生きていくことがすべてなのだと思いついて信じていたのです。

でも、そんな私たちは神様について何も知らなかったわけではありません。みことばははっきりと教えていました。ローマ1：19-21にこう記されていました。「:19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。:21 それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。」

まるで、緻密なロボットを組み立てた技術者の知恵や工夫がそのロボットを見れば明らかのように、自然界は、そのすべてを造られた創造主なる神様の神聖や偉大さを初めからずっと明らかにし続けてきました。だから、私たちが自然界を見れば、いや、私たち自身のからだを見ても、そこには人には決して理解することのできない、圧倒的な知恵や力というものを目の当たりにするのです。私たちは神様のことを知っていました。しかしそれでもなお、私たちは神様を知っていながら、その神様を神様として愛して、神様として感謝をささげ仕えていこうとはせずに、かえってこの神様をみずから拒んで逆らい続けていました。一切の汚れを憎んで、罪に対して今も怒りを燃やし続けておられるその神様の前に、生まれながら私たちはみずから罪に罪を重ね続けていました。すべての者が例外なく罪を犯したのです。みことば言っていました。ローマ3：10-11「:10 …「義人はいない。ひとりもない。:11 悟りのある人はいない。神を求める人はいない。」と。だれも神を求めようとはしませんでした。だからこそ、私たちに値したのは、ただ正しいさばき、永遠の地獄での苦しみでした。すべての者がみずから神様に逆らい続けていたから、すべての者が滅ぼされてしかるべきそんな罪人だったのです。死んでいた罪深い私たちには、この状況をどうにかすることはできませんでした。いや、さらに言えば、罪に死んでいた私たちは自分が死んでいるということさえ知りませんでした。だから神様を求めようとはしなかったのです。むしろみな、神様からより遠く離れていこうとして、自分勝手な道へと進んでいったのです。文字どおり私たちには何もできませんでした。私たちのうちには一切の希望などなかったのです。主キリスト・イエスを受け入れる前のすべての人の状態、それは、死んでいました。キリストから遠く離れていた者は例外なく、罪の奴隷としてみずから滅びへと足を踏み進めていたのです。みな赦しを必要

としていました。でも感謝なことここに話は終わっていませんでした。驚くべきことに、私たちには何もできなかったことを、ほかのだれでもない神様が成し遂げてくださったのです。赦しを神様ご自身が成し遂げてくださいました。それが二つ目にパウロが思い出させていた要素でした。

2) 赦しの達成 13b

二つ目は「赦しの達成」です。13節の続きを見るとこのように記されていました。「神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは私たちのすべての罪を赦し、」と。いったいだれが、死んでいた者を生かしてくださいましたのでしょうか？すべての罪を赦してくださったのでしょうか？私たちの努力や良い行いでしょうか？この世の何かでしょうか？いいえ、すべてを成し遂げてくださったのは、神様でした。聖なる神様に逆らい、ただ御怒りを引き起こしていたそんな罪人のために、神様が救いを用意してくださいました。何もできずに死んでいた私たちを、神様がキリストとともに生かしてくださいましたのです。このすばらしい出来事を、パウロはエペソ人への手紙の中でもこう口にしていました。私たちもよく知っている箇所の一つ、エペソ2：4-5にこう書いていました。「:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださいましたその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵によるのです。——」また8節にも「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」死んだ者が、死んでいる自分は生き返らせることなんてできません。しかし、いのちの源である神様には、それが可能でした。そんな生ける神様のあわれみのゆえに、死んでいた私たちは救われたのです。自分自身から出たものは何一つとしてありません。私たちはキリストを信じる信仰によって、恵みによって完全に赦されました。それらすべてがただ神様からの賜物・ギフトでしかなかったのです。パウロはそのすばらしさを自分自身のこととしてよく理解していました。いかに値しない大きな愛を、大きな罪の赦しを受けたのを覚えていました。だからこそ、皆さん、読んでいて気づきました？私たち今11節から学んでいます、11節からパウロはずっとコロサイの人々に対してこう言っていますね。「キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。」と。12節でも「あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、」13節も「あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに…あなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。」と。ずっと「あなたがた」「あなたがた」「あなたがた」と言っていたのです。でも13節の最後では、罪の赦しに関して何て言っていました？パウロは「私たちのすべての罪を赦し」と言っていました。パウロは自分自身も含めていました。自分自身も同じ赦しを神様から受けたのだ、と強調していたのです。そこには違いはありませんでした。パウロもコロサイの信仰者たちも同じでした。ユダヤ人であろうが、異邦人であろうが、今の私たちであろうが同じだったのです。すべての者は同じキリストにあって、同じ神様の恵みによって、罪を赦されて、救われました。だれひとりとして、自分の力でそれを勝ち取った者などいないのです。また凄いのは、こう書いていましたね。「私たちの罪を赦し」ではありませんでした。「私たちのすべての罪を赦し」と。キリストを信じた者の罪は恵みによって、確かにすべてが赦されました。犯した罪の一部が赦されたわけではありません。大部分が赦されていて、一部分はまだ残っているのでもありません。生まれながらに神様に逆らい続けてきたそんな私たちの罪のすべて、過ちのすべてが、キリストにあって赦されたというわけですね。皆さん、私たちがしてきた罪深い行いだけではありません。私たちがだれかに対して発した悪いことばだけでもありません。私たちが心の内で抱いていたすべての間違っただけの思いも、間違っただけの考えも、そのすべてがもうすでに赦されました。これまでの罪も、今もまたこれから先の罪も、キリストにあって赦されました。だからこそ、キリストにある者が今、罪に定められることは決してないのです。だから改めて考えてみてください。いったいどれほど値しない大きな赦しを私たちは受けたのでしょうか？どれほど大きな恵みを私たちは受けたのでしょうか？忘れてはいけません。キリストにあるこの赦しには、決められた数はありませんでした。あなたは今までこれだけの

回数に罪を犯してきましたね、これ以上やっているのだからもうあなたは赦されません、などというそんな限度はありませんでした。主は私のすべての罪を赦してくださったのです。キリストにある赦しは、不確かなものでもありませんでした。この軽い部分のところは赦すけれど、でもこの深刻な部分は赦されないかもしれません、赦すのは難しいかもしれません、などというそんな不完全なものではありませんでした。主は私たちのすべての罪を、完全に赦してくださったのです。

またキリストにある赦しは、私たちが何かを達成したから、私たちが何かそれに値する者となったから与えられたものでもありませんでした。これだけすばらしい行いをあなたがしたから、こんなすばらしい人になられたから、だから私は赦してあげましょう、ではありませんでした。罪深い私たちには、完全な神様の基準を満たすことなど到底できもせず、逆らい続けていたのです。死んでいたのです。本来そんな私たちに値したのは、ただ正しいさばきでしかありませんでした。でも、そんな私たちに主は恵みを示して下さって、すべての罪を赦してくださったのです。神様は私たちをキリストとともに生かしてくださいました。何もできずにただ滅びを待っていたそんな私たちを、キリストの十字架と復活のみわざが、それを通して生かしてくださったのです。こうして神様が私たちに新しいいのちを与えてくださったから、だから私たちは初めて救いの知らせを喜びました。愚かに思えたその福音が、人を救うことのできる神の偉大な力であるということに気づかされました。神様のみことばを愛する者へと変えられ、罪を赦してくださったその主のために生きていくこと、すべてをささげて生きていくこの人生こそがすべてにまさる最高の喜びなのだと思ったのです。赦しを達成してくださったのは、初めから終わりまでただキリストによる神様の恵みのみわざでした。テトス3：5-7でもパウロはこう言っています。「5 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。6 神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。7 それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです。」私たちは何もできませんでした。神がすべてを成し遂げてくださったのです。皆さん、いったい私たちの神はどれほどあわれみ深いお方なのでしょう？どれほど恵みに富んだ偉大なお方なのでしょう？そして、私たちはどれだけこの神様を喜んで、日々心からの感謝をささげて生きているのでしょうか？預言者ミカも神様に向かってこんなことばを口にしていました。ミカ7：18「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。あなたは、咎を赦し、ご自分のものである残りの者のために、そむきの罪を見過ごされ、怒りをいつまでも持ち続けず、いつくしみを喜ばれるからです。」「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。」と。皆さん、私たちが仕えている神様にまさるものなどあるのでしょうか？ほかにこのような神はいるのでしょうか？このような神はいません。並ぶものもいません。私たちもきょう同じように、赦しを達成してくださったこの神様を見上げて、この方の恵みを心から感謝して生きていくことができます。ただキリストにあって、私たち自身も十分な救いを手にすることができるのです。

さて、ここまで「赦しの必要性」と「赦しの達成」について語ってきたパウロでしたが、ここで話を終えていたわけではありません。彼はコロサイの兄弟姉妹たちが受けたその赦しに関して、さらに深い説明を加えていました。それが、彼が三つ目に挙げていたものです。

3) 赦しの本質 14 a 節

三つ目は「赦しの本質」でした。神様の赦しというものが、そもそもどんなものであったのかを、いま一度彼らに思い出させていたのです。14節はこのように続いています。「いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取り除け、」と。「債務証書」ということばが出てきました。いったい何でしょう？これには元々「自分の手で書く」とか「サインをする」といった意味が含まれています。そして特にこれは、自分自身がだれか相手に対して借金を負っていることを認めるサインをする証書、借用書のことを表していました。私はAさ

んに対してこれだけの借金をしています、これだけのお金を後日返金します、という内容をこと細かに記して、記録や証明として紙に残すのです。それが「債務証書」というものでした。パウロはそんなことばをここで用いていました。彼が言いたかったことは明白でした。私たちはみな、全員、ほかのだれでもない神様の前に、罪という抱えきれないほどの借金、負債を負っていたということです。まるで債務証書にびっしりと返さなくてはならない借金の内容が載っているかのように、神様に対する私たちの債務証書には、私たちがこれまでに犯したすべての罪や過ちが載っているのです。そんな債務証書を思い浮かべてみてください。そこに載っているのは、私たちの振る舞いやことばだけではありません。義なる神様が定めたいろいろな基準や戒めに反する、いかなる心の思いや態度もそうです。私たちがこの世に生まれてからこれまで、私たちが神様に逆らい続けてきたそのすべての罪がそこに記されているのです。私たちが抱いた悪意もねたみも、争いやプライドや怒りや嘘や欲や、人々に対して犯したのから個人的に犯した罪に至るまで、すべてのものがそこには記されているのです。どうです？ いったいどれほどの数の罪がそこに挙がるでしょう？ 私たちはみな例外なく、数え切れないほどの罪を神様に対して犯してきました。あまりにも大きな負債を私たちは神様に対して負っていたのです。その負債というものはあまりにも大きすぎて、返すことのできる人などだれひとりとしていませんでした。そして、そんな債務証書が私たちを責め立て続けていたのです。その債務証書を見ると、そこに記されているありとあらゆる罪の負債が私たちに突きつけられるときに、そのすべてが有罪のものとして、それがすべて事実のものとして認められました。だれひとりとして言い逃れをすることも、言い訳をすることもできず、ただ返すことのできないその膨大な負債の前に、私たちは罰せられて当然の存在だったのです。このように私たちは神様の前に霊的に破綻していました。

しかしそんな絶望的な状況にあった私たちに、信じられないことが起こりました。パウロはここで何と言っていました？ こう宣べていましたね。「いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、」と。聞きました？ 私たちにはどうすることもできなかったその債務証書を私たちが無効にしました、ではありません。あわれみ深い神様がそれを無効にしてくださった、というわけです。ここで用いられていた「無効にする」ということばには元々「一掃する」とか「消し去る」という意味があります。一掃するのです。完全に消し去ってしまうわけです。「痕跡を残さないように取り除く」といった意味も含まれています。痕跡を残さないように、すべて取り除くのです。これと同じことばが黙示録の中でこんなふうにも用いられていました。黙示録 21 : 4 にこう書いています。「彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」と。すばらしい光景だと思いませんか？ いつの日か、神様はすべてのものを新しくして、信仰者はそんな神様とずっとともにいて、悲しみや苦しみをもう味わうことはなくなりました。私たちの涙は、すっかり拭い去られるのです。そしてそれと同じように、神様は私たちの罪を完全に拭い去ってくださるというわけです。まるでホワイトボードに書かれていたたくさんの文字を、イレイサーで跡形もなく消し去ってしまうかのように、私たちを責め立てていたその負債を、神様がすべて消し去ってくださったというわけです。

また加えて、ここには「証書を取りのけ」ということばも使われていました。この「取りのけ」ということばの中にも「取り除く」とか「取り去る」という意味があります。「投げ捨てる」といった意味も含まれています。取り去ってしまうのです、完全に。さっきのことばとよく似ていますね。要するに、パウロは言いたかったことを、これら二つの似たようなことばを用いて強調していたのです。私たちのうちのだれにもどうすることもできなかったその大きな負債、それはもう完全に取り除かれましたと。神様に対して負っていたすべての罪は、神様ご自身がキリストにあって跡形もなく洗い流してくださったと。大きなあわれみによって私たちの負債のすべてはもう無効になったのだと。かつて詩篇の著者も、神様の赦しについて、こう述べていました。詩篇 103 : 11-12 にこう書いています。「天が

地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。」これが、神様の赦しでした。神様は破綻していたそんな私たちをあわれんでくださいました。罪を取り除き、東が西から遠く離れているように、私たちを罪から遠く離してくださったのです。神様は驚くべきその赦しを、それに全く値しない者に与えてくださいました。すばらしいと思いませんか？

でも、最後に一つだけ大切な質問があります。果たしてこんなにもすばらしいこの赦しを、神様はいったいどのようにして成し遂げたのでしょうか？聖く正しいこの神様の前に犯した私たちのすべての罪というものは、いったいどのようにして取り除かれたのでしょうか？それが、最後パウロが四つ目に挙げていたことでもありました。

4) 赦しの費用 14b

四つ目となる要素は「赦しの費用」でした。決して勘違いしてはいけません。聖なる神様は何もなしにただ罪を見逃すことなど絶対にできませんでした。何の支払いもなしにすべての負債を取り除くなどということは到底できませんでした。聖なる神様が聖なる神様であり続けるためには、罪は必ずすべて罰せられなければいけなかったのです。では、いったい神様はどのようにしてこの問題を解決したのでしょうか？よく見てください。14節の最後でパウロはこう宣べていました。「神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。」「十字架に釘づけにされました」と。イエス・キリストの十字架、この方の流されたその血潮、ささげられたそのからだ、その尊い死が、神様の御神怒りを満足させ、罪の赦しを成し遂げてくださいました。私たちのすべての罪が、この主の十字架にあって釘づけにされたのです。

この当時、ローマの世界において十字架につけられる犯罪者の頭上には、「罪状書き」というものが付けられていました。覚えていますか？イエス様が十字架にかかった時も、イエス様の上にも付けられていましたね。ヨハネの福音書を見れば、そのことは明らかです。ヨハネ19：19-20に「:19 ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」と書いてあった。:20 それで、大ぜいのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったからである。またそれはヘブル語、ラテン語、ギリシヤ語で書いてあった。」と。罪状書きを付けるのは一般的に行われていたことでした。ローマ政府はわざわざ十字架につけられた者たちの頭上に罪状を記して、多くの人の前で見せしめにしていたのです。辱めと嘲りのためにそれを公の場で行っていました。

でも皆さん、私たちがイエス・キリストの十字架を見るときに、私たちはそこに、自分たちの罪が打ち付けられていることを見るのです。ほかのだれでもない私やあなたが犯した罪のすべてが十字架に釘づけにされているのを見るのです。その罪状の数はもう計り知れません。生まれながらに犯し続けてきたそのすべての罪が、本来であれば私たち自身が罰を受けるべきその罪が、十字架に打ち付けられました。罪の全くないキリストが、神の子羊であるこのお方が、代わりにその罪を背負って神の御怒りに耐え忍び、神に罰せられて死んでくださったのです。Iペテロ2：24にこう書いていました。「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」イザヤ53：5でもこう言っていました。「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」キリストの十字架は私たちにいやしをもたらしてくれました。罪の全くないこの神の御子が、本来十字架にかかる必要もないそのお方が、代わりに罪とされ、御怒りをその身に受けて罰せられ、そのいのちをささげてくださったからこそ、この方において私たちは神様の前に義とされたのです。

皆さん、キリストの十字架こそ、私たちに必要なものでした。私たちの負債をすべて支払うのに十分なものでした。ただキリストの十字架にあって、私たちの罪はすべて赦されたのです。だとすれば、私たちはどれほどこの十字架をいつも感謝しているのでしょうか？どんなに喜んでいるのでしょうか？これがなか

ったなら、私たちはもう何もなかったのです。文字どおり罪の赦しのために私たちができたことは何一つとしてありませんでした。私たちはただ単に罪に罪を重ねて、返せないほどの負債を自分で負って滅びを待つだけの身だったのです。しかし、そんなどうしようもない私たちのすべての罪を、キリストの十字架は、赦してくださいました。これまでに犯してきたすべての、どんな罪も、です。確かに、時に私たちは自分の犯した罪の大きさにさいなまれて、罪悪感に襲われることがあるかもしれません。こんなひどい罪を犯しているような自分は決して赦されない、と自分自身を責め続けるかもしれません。自分の罪は赦されているのだろうか疑問に思ったり、疑いを抱くこともあるかもしれません。でもそんな時は、みことばの教える真理に心を留めることです。私たちの罪は、キリストの十字架にあってすべて赦されました。私たちを責め立て続けていたその債務証書は、もう神様によって取り除かれたのです。このキリストのうちにあって、私たちはどんなときも十分な赦しを見出すことができます。

だからもし、まだこの方にある赦しを知らない方があるなら、どうかこの救い主を求めてください。この方の前にへりくだって、これまで自分のために生きてきた罪に汚れた歩みを悔い改めて、赦しをもたらしてくれるあわれみ深いその主を信じ受け入れてください。あなたに必要なのは、何よりも罪の赦しです。そしてそれを与えることができるのは、ただイエス・キリストしかいません。この方のうちにしかありません。みことばは、あなたがそのようにしてこの方を求めるなら、あわれみ深い神様は救いを与えてくださる、とそう約束してくださっています。だから、どうか「きょう」と言うこの日に、この方の前に出て赦しを求めてください。

また、もうすでにこのキリストにある赦しを知っているとされる皆さん。私たちはどんなときも喜んで、どんなときも賛美することができます。かつて罪の中に死んで、大きな負債を負っていた罪深い私たちが待っていたのは、ただ聖なる神様の御怒りでした。だれにもその問題を解決することなどできず、ただ滅びを待つしかなかったのです。でも、そんな私たちを神様がただ一方的にあわれんで、キリストにあって赦してくださいました。私たちのすべての罪は十字架にあって釘付けにされたのです。キリストの大きな犠牲が、私たちの大きな罪を取り除いてくださいました。パウロはそのキリストの十字架の偉大さをよくわかっていました。その十分性をよくわかっていました。だからパウロは別のところではっきりとこう口にしていたのです。ガラテヤ6：14「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」と。果たして今、私やあなたが誇りとしているものは、いったい何でしょう？主イエス・キリストの十字架でしょうか？それとも、それ以外の何かでしょうか？決して、私たちがいったいどんな状態から救い出されたのかということをおぼえてはいけません。私たちが本来何に値する者だったのかということをおぼえてはいけません。私たちは値しないものを受けました。完全な罪の赦しを成し遂げてくださったその十字架だけが、私たちの誇りです。だから、その十字架を心から感謝しながら、今週も主のためにも歩んでいきましょう。